

「トウキデイデスの罫」 その三 戦争を回避

松浦 純子

「トウキデイデスの罫」とはグレアム・ハリソンの造語で、従来の覇権国と台頭する新興国が、戦争不可避な状態にまで対立する現象を意味する。彼によると、過去五百年間に新興国が覇権国を脅かした例は十六例あり、そのうち四例は戦争を回避したとある。

戦争に発展した例は思い出せても、回避した例は思い出しにくい。戦争回避で有名なのは米ソのキューバ危機であるが、今回はイギリスとアメリカの対立そして戦争回避を見ていきたい。

まず、戦争になってしまったが、アメリカは母国イギリスとの戦争に勝って独立を達成した。フランスのルイ十六世はこの戦争でアメリカを支援したが、戦後アメリカが選んだのは皮肉にも母国イギリスとの友好だった。財政難の中、無理してアメリカを支援したルイ十六世は気の毒にも革命で命を落とすことになった。

次に起きた戦争は、米英戦争である。原因はフランスのナポレオンが作ったが、独立後およそ三十歳のアメリカが母国イギリスを単独で打ち破ったのである。アメリカは自国の利益のためなら昨日の友とでも親とでも遠慮なく戦う。

そして三番目が表題の戦争を回避した例である。十九世紀は圧倒的工業力を持つイギリスの時代だった。しかし、ヴィクトリア女王の死去に合わせるかのようには、覇権国イギリスは新興国アメリカの前になすすべを失っていった。アメリカは既に、「モンロー教書」でヨーロッパ諸国がアメリカ大陸諸国に干渉することに釘を刺し、さらに世紀末には「フロンティア消滅」を宣言して、今後の海外進出を表明していた。

十九世紀末のベネズエラと英領ギアナの国境紛争を皮切りに、アメリカは反ヨーロッパの立場に立って、見せかけのラテンアメリカ支援を行なった。イギリスは旧大陸で新興国ドイツの世界政策という新たな脅威に直面し、また新大陸に強力な同盟国を持っていなかった事情から、アメリカと対立する度に我慢・譲歩を強いられるようになった。そのお陰で両国の対立は戦争には発展しなかったが、以後イギリスは今日までアメリカに主導権を握られるようになった。

新旧交代の寂しさと虚しさを見た気がする。